

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

てんじ かいせつ
展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

きょうと こうきゅうしつ きてん
京都の高級漆器店
みのや
美濃屋

今回は、ちょっぴりぜいたくで、
とつわ あきな
とってもすてきな器を商っていた
みのや こうきゅうしつきてん
「美濃屋」という、京都の高級漆器店のお話です。



しつきしにせみのやほぞんしりょう
漆器老舗美濃屋保存資料
めいめいぼんかくしゅ
銘々盆各種のうち

明治～昭和時代 19～20世紀
京都国立博物館蔵（稲垣孫一郎氏寄贈）

しつき うるし ぬ
漆器は、文字通り漆が塗られた器。

うるし ねば じゆえき かわ かた はじ
漆は、ウルシという木から採れる粘り気のある樹液で、乾くと大変硬くなり水を弾きます。
顔料を混ぜて絵の具のように使ったり、器の表面に貝殻や金属の粉などを貼り付けて文様
せつちやくざい しつき
を作るための、強力な接着剤として使ったりもします。丈夫な漆器を作り、その上にさら
うるし そうしよく ひま しつき
に漆で美しい装飾をほどこすには、大変な手間と暇がかかります。そのような漆器は高級
あつか みのや あきな
品として扱われました。美濃屋はこの高級品を商うお店でした。

みのや そうぎょう あんえいがんねん きせいひん なら ほんばい
美濃屋の創業は安永元年(1772)。現代のお店のように既製品を並べて販売するのではなく、

伝統的な受注生産の形をとっていました。受注生産は、お客さんの注文を
聞いてはじめて品物を作る方法です。美濃屋の主人は、お客さんの好み
いえがら
や家柄などを考えながら、どんな漆器を作るのかを決めました。器の
うるし つや ずがら もんよう
形・大きさ、漆の色・艶、図柄、文様といったことを一から考え決
めていくのです。注文を受けてから製品がお客さんに納品されるま
のうひん
でに1年から3年ほどかかったと言いますから、どれほどじっくりと
ものづくりが行われていたか、想像できますね。



このようなお店のお客さんは教養も高く、ウイットを好む人も多かったでしょう。美濃屋の主人には、優れた美的センスだけでなく、お客さんと対等に話せるくらいの教養が求められました。例えば、古典文学作品の一場面をそのまま器に描くのではなく、作品をよく理解し、そのエッセンスを気の利いたデザインにまとめてみせなければならないのです。また、そのように製品を作ってくれるよう、職人に対して的確な指示を出せるほどに十分な、技術的知識も必要でした。

美濃屋のすごいところは、主人の手腕に限られません。主人の指示に応え、その期待以上の品質の漆器を作る、大勢の優秀な職人たちに支えられていたところにもあります。

長く使ってもゆがみやひびのこない上等な漆器を作るには、あらゆる工程で細心の注意を払い、丁寧に仕事をする専門の職人が必要でした。木地を加工する轆轤師や指物師、その上に漆を塗る塗師、さらに金や銀などの金属粉を使って装飾を加える蒔絵師たちです。しかも、美濃屋の暖簾を支えた職人は、それぞれの高度な技術だけでなく、豊かな芸術的才能も持ち、創意工夫を怠らない名工とよばれる人々でした。

明治時代以降、「作家」という考え方が生まれ、職人たちは徐々に個人単位で仕事をするようにもなります。しかし、お客さんの要望を理解し、十分な技術的・文化的知識と芸術的センスを併せ持った主人と、時には挑戦的とも言えるその指示に対し、技術と工夫とで応えた名工たちとの共同作業は、より厳しく洗練された漆器を創作したように見受けられるのです。美濃屋製の漆器は、「美濃屋」という一軒のお店の下に結ばれたプロ集団の連携プレーによって、その品質と品格を保たれていたと言えるでしょう。

戦争中の昭和18年(1943)、厳しい時世ですが、美濃屋は昭和天皇の第一女、照宮の婚礼のために和食器を揃えて納めています。それほどの実力ながら、終戦の年、第九代目当主・故稲垣孫一郎氏によって、美濃屋の暖簾は下ろされました。材料と職人の不足から、今までの品質を保てないとの判断からです。ものづくりに対する激しく妥協を許さない意識の表れです。



しつきしにせみのやほぞんしりょう
漆器老舗美濃屋保存資料
からはなからくさしつぼうめりかしき
唐花唐草七宝塗菓子器

塗り：青野伊助 明治時代 19世紀
京都国立博物館蔵（稲垣孫一郎氏寄贈）

平成2年(1990)、稲垣氏は美濃屋の商品見本や歴代当主の愛蔵の漆器など、合計260件強をその詳細な目録と共に当館に寄贈されました。このコレクションは、良き時代の京都のものづくりの一端を伝える貴重な資料となっています。一生に一度でも、最高級の漆器を注文するチャンスがあるとしたら、みなさんはどんな漆器を注文しますか？夢の漆器を想像しつつ、優れた技と豊かな遊び心に満ちた伝統の漆器を、どうぞお楽しみください。

ながしまめいこ
(工芸室 永島 明子)